

第十四章 訛音の心理

人は誰でも語源に關して自己流の解釋を持ツて居る。その解釋は時として誤ツて居る事がある。し

かし、その誤まツた解釋が民衆に普通である場合には、その解釋に合ふ様に、言葉の方が改造される事がある。この場合は、しばしば、音韻法則を飛越えた異常な訛が生れ出る。

ズルンサイ（荳菜）

長門厚狹郡方言。この若芽は粘液を被り、ズル／＼するから、それでズルン菜と名づけた。

ギンナミ（銀杏）

肥後阿蘇郡方言。鴨脚子の實だから、ギンナ實とした。

キミカン（金柑）

因幡氣高郡方言。黄密柑と心得たもの。

ネブリカン（ネーブル）

廣島縣方言。祇り柑と解釋したもの。

シゴトヂイサ（舅）

信州下水内郡方言。姑をシゴトバサといふ。シウトの語源が不明になつたために、「仕事爺様」としたもの。

ヒトミ（人おめ）

赤ん坊が見知らぬ人を恐れて泣く事である。「査言字考」に人臆面とある。ヲメは「おめす臆せず」のオメである。今もヒトオメ（尾張河和町）ヒトメ（津輕・盛岡・大和吉野郡・神戸附近・隠岐）といふ所がある。然るに、石見・土佐・長崎市ではヒトミといふ。「人見」を聯想したらしい。東京では、「人見」では物足りないと思つたと見えて、小癪にも「人兄知り」として得意になつて居る。今では、その人兄知りがヒトオメを「矯正」しようとして居るのだから恐ろしい御時世になつたものだ。

ニギリ（右）

右をミギリと言ふ所は今も各地にある。それを岩手縣紫波郡ではニギリといふ。「握り」を聯想したらしい。右手で握るから。

ハリ（バロメーター）

越後吉田町で、晴雨計をバルともハリとも言ふ。晴雨計の針を聯想したらしい。

シミセ（老舗）

シミセルは爲似せるで、爲慣れる意である。今も紀伊日高郡にはシミセルといふ言葉がある。シミセはその連用形である。然るに、阿波名東郡では、店を聯想して、シミセとした。

テエモハリオチモ

（傾城島原蛙合戦）かさいの郡司は一人の男子源六は勘當、けにも晴にもびはと申す娘（浮世風呂）けにも晴にも一人の男だけに、あまやかして奉公にも出しませんから、今での後悔さ。ケニモ晴ニモは、「不斷着にも晴着にも」といふ意味である。佐賀縣では「手にも腹にも」と解したと見えて、「チエモハリヤモ」といふ。越中・加賀ではデニモハレニモ。

ニアツセル（めあはす）

～岩手縣紫波郡飯岡村で、「從兄妹同志、にあわせた」などと言ふ。「似合はせる」と心得違へしたものの。

カイリバタシ（輕業師）

輕業をカリバタと言ふ所は多い。カルワザの訛かと思ふ。然るに、大阪府では「返る」を聯想してカイリバタといふ。

フリラン（風鈴）

飛騨吉城郡方言。振り鈴と心得たもの。

エンタツ（煙突）

大阪市を始め、近畿・中國・四國・關東に多い。「立つ」を思寄せたもの。

ニカヤ（二階）

越後吉田町方言。やは屋を思寄せたもの。

シバヤ（芝居）

東京を始め、各地に多い。これも芝屋を思寄せたもの。

トキエ（時計）

飛騨・美濃・尾張・伊勢・紀伊・備後・筑前・長崎市等にある。トキ（時）を思寄せたもの。

オトガホ（願）

石見那賀郡下府村方言。顔を思寄せたもの。

ヘソナワ（臍の緒）

埼玉縣幸手町・上總山武郡方言。臍繩である。福島縣北部ではヘソナアといふ。

フクロビ（綻）

「浪花聞書」にある。今も各地で聞く。袋を聯想した訛ではないかと思ふ。

フキノ（布巾）

「書言字考」に「鉢盂巾ハチムキ 沙門覆ハチムキ鉢巾也」とある通り、宋音から來た佛敎語であるが、それがフ

イキン、フッキン、フキンとなるに及んで、拭布を聯想し、遂に、美濃・石見・島原・天草・鹿児島などでは、勇敢にフキノと言改めて居る。

ステンシヨ（停車場）

相模・大阪府・播磨・備中などにある。ステン所を思寄せたものか。

タイワ（タイヤ）

埼玉縣方言。輪を思寄せたもの。

フトギ（蒲團）

加賀能美郡方言。フト着である。

バオチ（場うて）

衆人の面前に立つて應ずる事を、筑前朝倉郡でバオチスル、土佐でバオセガスルといふ。場落、又は場押と解して居るらしいが、もとはパウテであつたかと思ふ。ウテルとは應ずること。

ボンノクビ（盆の窪）

越中出町・尾張愛知郡方言。ボンノ頸と考へたらしい。能登・加賀ではブンノクビ。

ハダカヌギ（肌脱）

奥南部方言。裸脱である。

ニンゲンボウ（人形）

人形を、ニンギン（大分縣大分郡）ニンゲ（小豆島）ニンゲー（廣島御調郡）ニンゲンボウ（廣島双三郡）などと言ふ所がある。人間を聯想したもの。

キクオンキ（蓄音器）

秋田縣南秋田郡方言。聞く音器である。

ゴロマ（獨樂）

獨樂はコマツブリの下略であるが、それをゴマといふ所は近畿を始め各地に多い。大阪府ではゴロマと言ふ。ゴロ／＼廻る事を聯想したのである。大和吉野郡下北山村では、キリ／＼マ、又は、キリマヒと言ふ。

カゲスム（物蔭に隠れて窺ふ）

「かたこと」に、物を推し測ることをサケシミと言ふは、下照ひげすみの訛かとある。慶安頃の京都詞である。今岩手縣上閉伊郡で、物蔭にあつて、耳をすまして様子を窺ふ事をサゲスムといふ。越後吉田町では、蔭を聯想したと見えて、カゲスムと言改めて居る。

コヤイビ (小指)

若狹・志摩・大和・岡山・備後・福岡・日向にある。オヤユビからの誤った類推である。

ワサウエ (田植)

田の一枚々々をオサといふ (青森・岩手・茨城・栃木・駿河・美濃)。従って、田植をオサウエ (大分縣大分郡) といふ。然るに、オサが廢語になつた地方では、早稻を聯想して、ワサウエ (和歌山・出雲・周防・大分市) と言つてゐる。

ボッコ (天秤棒)

天秤棒をオウコ (古語アッコの訛) といふ所は西日本に多いが、福井縣では棒を思寄せてボウコといふ。

ボテウリ (屑屋)

箆をかついで、魚などを賣つて歩く者をボテフリと言ふ所は、宮城・福島・千葉・新潟・山梨・静岡・滋賀・三重・和歌山・石見などにある。「書言字考」に棒手振とあるが、實はボテは箆、ボテフリは箆振りといふ意味である。岐阜市や尾張では屑屋をボテフリといふ。それを若狹大飯郡ではボテウリと訛る。「賣り」を聯想したらしい。しかし、屑屋は買ふ方だから、ウリは變だと思つたと見え

て、ボテ買ヒと改めてゐる。

オジ (大人)

大人をオセといふ所は九州 (佐賀・長崎以外)・四國全部・中國全部・播磨にある。オーセ (但馬・岡山・大分) と言ふ所もあるから、語源は大兄である事が判る。然るに、志摩越賀村では、叔父と考へたと見えて、男の大人をオジといひ、之に對して、女の大人をオバといふ。

マヒゲ (眉毛)

眉毛をマイゲと訛る所は、京都市を始め、各地にある。所が、マイゲと聞いて、「目髭」を聯想した人が多かつたと見えて、和歌山・兵庫・因幡・山陽道・香川・愛媛では、マヒゲといふ。マイヒゲ (眉髭) といふ所も和歌山縣にある。

トラホーメ (トラホーム)

トラホー目を聯想したもの。福島縣方言。